EDITOR'S NOTE

この本が皆さんの御手元に届く頃には、もはや〈フジ・ロック〉、〈サマーソニック〉共に、無事終了しているはず。今年の夏フェスは、いかがだったでしょうか？　と、ちょうど1年前の原稿のカット&ペーストから始めてみました。もうへとへとでありんす。なので、今号はここだけはゆるゆるで送りします。あとは、ラヴ・ソング特集を筆頭に、激濃厚なので、よろぴくです。

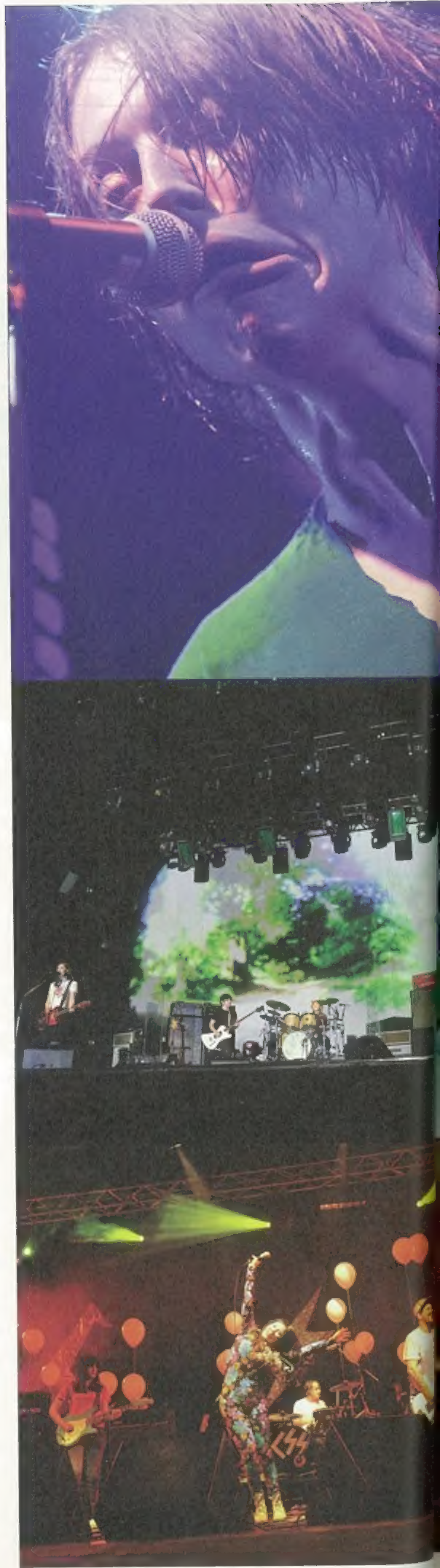
7月に入ってから、ヘルニア悪化&謎の激頭痛に苦しんでいたところ、なんでも整体の先生によれば、左首の後ろの痛みを無意識にかばってたせいで、そこから首の中心に対してちょうど反対側にある右首の関節もおかしくなっており、それゆえの激頭痛だった模様。整体の先生曰く、「デスクワークは出来るだけ控え、30分に一度歩くこと」だそうで、それじゃ仕事になりまへんがな。で、「日々とにかく歩け」というお達し。なので、〈フジ〉三日間歩き回ることに決定。ここ数年の〈オアシス〉周辺で友達とダラダラ過ごすというパターンも改善すべく臨んだわけです。

といいつつも、金曜朝まで仕事だったので、東京を出発したのは、午後。ジェイミー・リデルにも、ラスカルズにも、スプーンにも、ゴッシプにさえ間に合わず。とほほ。で、結局のところ、今年の〈フジ〉はザ・ヴァインズでスタートすることになったでヴァインズ。ライヴが始まる前にステージ裏を覗きにいったんだけど、もうクレイグが完全にパッパラパー状態で、あれはハラハラしたなー。でも、良かったでヴァインズ。あの1曲ごとにメンバーがお辞儀するの、絶対、ビートルズの真似だよね。で、その後、トムの髪型が長髪のセンター分けという、すっかりトレビアンな感じになったカサビアンを何曲か眺めながら、得意のベンジーのモノマネをしつつ、「次はシャーベッツが観たい」とか嘘八百。結局、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン待ち。15年前の〈川崎クラブチッタ〉でのド下手かつ、「ほとんどDATから音が鳴ってんじゃん!　『ラヴレス』の曲じゃなくなると、いきなり音圧下がんじゃん!」というライヴを観た人間としては、期待感皆無。ただノイジーで、ループものだと、絶対うとうとするのに気持ちいいと思い、〈グリーン〉の後方中腹辺りをキープ。うとうとするにはばっちりでした。相変わらず、ドラムが学園祭レヴェルなのには、ちょっと感動いたしました。で、電気グルーヴ観たさに〈オレンジ・コート〉に移動。でも、なんか出音がちょっとおかしくて、不完全燃焼。でも、セットの流れとか、アレンジ的にも、絶対、以前の〈グリーン〉を凌ぐ出来では。あとは、ダン・ル・サック覗いて、グランド・マスター・フラッシュの「え、今は何年ですか?」な感じを楽しみつつ、寝ました。

土曜日は、編集部スタッフ、ゆうこ、ゆーだいのゆーゆーコンビがゆーゆー爆寝しているのを尻目に、コーティナーズを見学に。学園祭でした。で、ハード・ファイ。リッチーの真っ青なポロ・シャツとドロボー髭に撃沈。で、クリブス観るつもりが、急遽エロールの取材時間が出たもんで断念。取材後、ズートンズのおしり数曲を見学。やっぱ最初のアルバムがいいっすね。で、伝説フラワー・トラヴェリン・バンドを観に。超期待ゆえ、わざわざ〈ヘヴン〉まで来たのに、70年代のフュージョン・バンドみたいな音色と演奏に1曲目の途中で退散。で、例によって、期待せずに観たプライマルズ。いつもそうなんだけど、やっぱよくて、なんか頭来る。"アイム・ルージング・～"と"スワスティカ・アイズ"が特に○。でも、ゲスト参加のCSSハナエちゃんの普段ステージでは見せないワンピース姿が◎。で、アンダーワールド。う～ん、まあ、悪くなかったっす。で、深夜の〈レッド〉に移動。エロール・アルカンは、う～ん。スウィッチは、う～ん。で、これまたしゃくなんだけど、最後のリッチー・ホウティンがばっちりでした。同じ禿げ方してる人間としては嬉しゅうございました。というわけで、リッチー法典を編纂。寝ました。

結局、日曜日は例年通り、遅めの活動開始。夕方の豪雨もあって、「CSSに全力を注ぎたい」というエクスキューズをおっ立て、だらだら。で、CSS、良くも悪くも、ライヴ・バンドとしてはまったく別物。以前の学園祭さえも通り越したゴミ感がなくなっていたのと、2ndからの曲がまだこなれてないのがちょっと残念だったかな。でも、ドラム、TCTCだっけ?　あいつがパワー・ドラマーなのが良くない。帰り時間の関係で、ザ・ミュージックは前半戦6、7曲。頭3曲辺りはかなり固かったので、後半観たかったかなー。その後、〈レッド〉でやってるネオン・ネオン（これが良かった！　バンド編成だと思ってまへんでした）を覗きつつ、今年の〈フジ〉はあっさりと退散。というわけで、リッチー法典を編纂。しつこい。では、今年も、夏フェス・シーズンにほとんど無関係な1冊。世間とズレてるのは承知の上で、今号もさらなる自信を持って、お届けしたいと思います。いや、頑張った。では、今号も楽しんでやって下さい。

SOICHIRO TANAKA / 田中宗一郎

photography by KAZUMICHI KOKEI

snoozer
ISSUE #069

EDITOR
田中宗一郎 Soichiro Tanaka

ASSISTANT EDITOR
萩原麻理 Mari Hagihara
佐藤望美 Nozomi Sato
平野祐子 Yuko Hirano
永松雄大 Yudai Nagamatsu

PRODUCTION ASSISTANT
上野恒星 Kosei Ueno

PHOTOGRAPHY
相澤心也 Shinya Aizawa
井上雅央 Masa Inoue
ジェイソン・エヴァンズ Jason Evans
加藤亜希子 Akiko Kato
古渓一道 Kazumichi Kokei
ジェイ・ブルックス Jay Brooks
西郡友典 Tomonori Nishigori
森川陽介 Yosuke Morikawa
吉場正和 Masakazu Yoshiba
ジョナサン・ワース Jonathan Worth

INTERPRETATION
河原希早子 Masako Kawahara
立神和依 Kazuyo Tategami
伴野由里子 Yuriko Banno

TRANSLATION
大野郁子 Ikuko Ohno
川田志津 Shizu Kawata
長門雅美 Masami Nagato
溝口恭子 Kyoko Mizoguchi

ASSISTANT
今村真紀 Maki Imamura
永田真由美 Mayumi Nagata

PRINTING DIRECTOR
石井律 Ritsu Ishii

PRINT
凸版印刷株式会社 Toppan Insatsu, Japan

PUBLISHER
孫 家邦 C.P.SUN

SNOOZER
3-12-3-3F, KITA-AOYAMA
MINATO-KU, TOKYO
TEL.03-5766-8366 FAX.03-3499-0725

PUBLISHED by
LITTLE MORE CO.,Ltd / 株式会社リトル・モア
3-56-6, SENDAGAYA
SHIBUYA-KU, TOKYO
TEL.03-3401-1042 FAX.03-3401-1052

2008年10月18日発行
第12巻第5号（通巻78号）

The Vines

by
Soichiro Tanaka
photography
by
Akiko Kato

ロック・イズ・バック!——そんな風に世界中が色めき立ったのは、2002年のこと。そして、その主役は、世界規模で見た場合、ストロークスではなく、間違いなく、このヴァインズだった。バンドの中心人物、クレイグ・ニコルスは、豪州の片田舎から連れ出されるや、瞬時に、時代のポップ・アイコンへと昇りつめる。セックス・ゴッドの異名を取るほどに。だが、そもそも音楽以外には何ら外界との接点を持つことの出来ない、精神疾患を抱えた、元ひきこもり少年だった彼は、やがて内側から崩壊。破滅の道へ。すべては暗礁に乗り上げる。だが、ヴァインズは帰ってきた。いまだすべては不安定なまま。だが、輝きは失われていなかった

クレイグ・ニコルスは、やはりクレイグ・ニコルスのままだった。2ndアルバム以降、少しずつバランスを崩し出した頃に比べて、良くも悪くも何も変わってはいなかった。勿論それは、彼が抱える精神疾患、アスペルガー症候群のせいでもあるのだが、相変わらず精神状態は常に不安定。今回、そうした局面を、期せずして二度ほど目撃することになったが、彼がバランスを崩し出すと、すぐにメンバーもスタッフもさっと身を引いてしまう。おそらくはそれが互いにとってもっとも有益な方法だとはわかっていても、その光景はどうにも痛々しく、僕のような人間には、それを日常のこととして受け入れることは、とても一朝一夕には無理だと思わせるに十分だった。

〈フジ・ロック〉でのステージ終了後、長年ずっと彼らのインタヴューを担当していた元本誌編集部員、唐沢真佐子がバックステージに顔を出した際に、会話を交わす間もなく、いきなり「出て行け!」と怒鳴り声を上げるクレイグ・ニコルス。つい前日まで、彼女の消息をいろんな人間に尋ねていた人間とは、とても同一人物とは思えない態度だが、端から見る限り、ほとんど誰のことも区別がつかないぐらい、完全にフリーク・アウトした状態だった。

だが、こうしたクレイグ自身の常に不安定な精神状態から生み出されるからこそ、ヴァインズの音楽は他の誰にも真似の出来ない剥き出しの生々しさを持ちえている。ヴァインズの音楽を凡百のパワー・ポップ・バンドから遠く引き離し、特別なものたらしめているのは、クレイグ・ニコルスの希代のメロディ・メイカーとしての才能と共に、こうした残酷な構造があってこそなのだ。そういう意味からすれば、ここ日本でも9月最終週にリリースされることが決まった通算4枚目のアルバム「メロディア」は、文字通り、完全復活作だと言っていいだろう。何故なら、愚鈍なまでに粗雑な世界と、人里離れた秘境で育った五歳児のように感情が剥き出しになったままの青年が、時として壮絶な歪みを軋ませ、時としてほんの一瞬だけ幸福な邂逅を見せるという、ヴァインズ特有の感情のジェットコースター状態がまたここで再現されているわけだから。しかも、その大半が2分前後のコンパクトなポップ・ソングとして。

それにしても、〈フジ・ロック〉でのステージは素晴らしかった。ステージ上のクレイグには、やはり圧倒的なカリズマがある。一瞬たりとも目が離せない。ステージに上がる前から、完全にフリーク・アウトしたまま、頭の上に何度も水を降りかけ、胸元を引きちぎったTシャツを脱いだり、さかさまに着たり、また脱いだり。極限まで顔面を引きつらせ、目をひんむき、完全にひっくりかえった声で絶叫する。終始ハラハラさせられたし、勿論、決してうまいバンドではないが、時折、とんでもない瞬間が何度も巻き起こるのだ。「一緒に歌ってくれ、ハンド・クラップも!」という短いMCの直後始まった"ライド"の素晴らしさったら、なかった。オーディエンスも最高だった。おそらくその大半が、彼の帰還を心から祝福していた。にもかかわらず、ステージ上の青年は、いくつもの曲で「ここから出て行くんだ」と絶叫しているのだから、どうにも残酷なパラドクスと言わざるをえない。やれやれ。だが、ポップとは、そんな風にどうにも不思議な構造を持ったものなのだ。

以下のインタヴューは、〈フジ〉前日に、都内で行われたものだ。インタヴュー自体は終始、穏やかだが、撮影タイミングでは、かなりの緊張が走る殺伐とした現場になった。その日、1本目のテレビ取材の後半でかなり支離滅裂な発言が飛び出し、スタッフが冷や冷やし出したところで我々の順番に。部屋に入ってくるなり、「僕の尋ねることに、誰もきちんと答えてくれないんだ!」と金切り声を上げるクレイグ。これまでも何度か通訳としてクレイグに会っている編集部萩原麻理が諸々の相談に乗ってからは、ようやく一度は落ち着きかけたものの、撮影が始まるやいなや、「どいつもこいつも、わざと日本語で話してるんだ! 誰の言うことも信じられない」と、レコード会社のスタッフ初め、周囲の人間に容赦ない罵詈雑言を浴びせかけ始める。わざとギョロ目を剥き出し、日本語を真似た意味不明の叫びを上げ出す。かくして、準備した撮影アイデアはすべて断念。

その後、短いブレイクを挟み、取材部屋に戻ってきた時は、少しばかり落ち着きを見せ始めたので、とにかく彼がリラックス出来るような話題から、インタヴューを始めることに。その後は、終始、穏やかさを取り戻したものの、途中、クレイグがサングラスを外した時に、さっきと比べて、彼の白目が少しばかり赤身を帯びていたので、納得する。そうか、なるほどな。やはり普通の状態では正気を保っていられないということなのだろう。おかえり、クレイグ。この素晴らしきクルエル・ワールドへようこそ。

——————interview with CRAIG NICHOLLS & HAMISH ROSSER

●これ、マサコからのメール。

クレイグ・ニコルス（以下、クレイグ）「ワオ! あ、でも、僕、読めないや（笑）」

●でも、メールのこのキャラクター、覚えてない?

クレイグ「あ、アストロ・ボーイ（鉄腕アトム）だ。うん、彼女にアストロ・ボーイもらったの覚えてるよ。今でも持ってるよ。すごく好きなんだ」

●あいつはね、このオーストラリアに取材に行った後に、すべてやり切ったと思って、辞めたんだよ。

ヘイミッシュ・ロッサー（以下、ヘイミッシュ）「てことは、この記事の後?」

クレイグ「彼女、今は何やってるの?」

●音楽業界からは離れてるんだ。

クレイグ「ああ、そうなんだ。オッケー」

●また、仕事は始めてるけど。

クレイグ「よかった。じゃあ、僕と同じだ（笑）」

●でも、〈フジ〉にはヴァインズを観に来るって。

クレイグ「クール! じゃあ、会えるんだね」

●うん。で、今日は君と話すのは初めてだし、あいつの代わりってことだから、ちょっと荷が重いんだけど。

クレイグ「大丈夫（笑）。僕の方も、インタヴューらしいインタヴューは、ほぼ初めてって感じだしね」

●じゃあ、自分達はとしては、このアルバムは自分達のどういう時代の、どういうフィーリングをリプリゼントしていると思いますか? どこか、もう一回残酷な世界に戻ってきたっていう宣言でもあると思うんだけど。

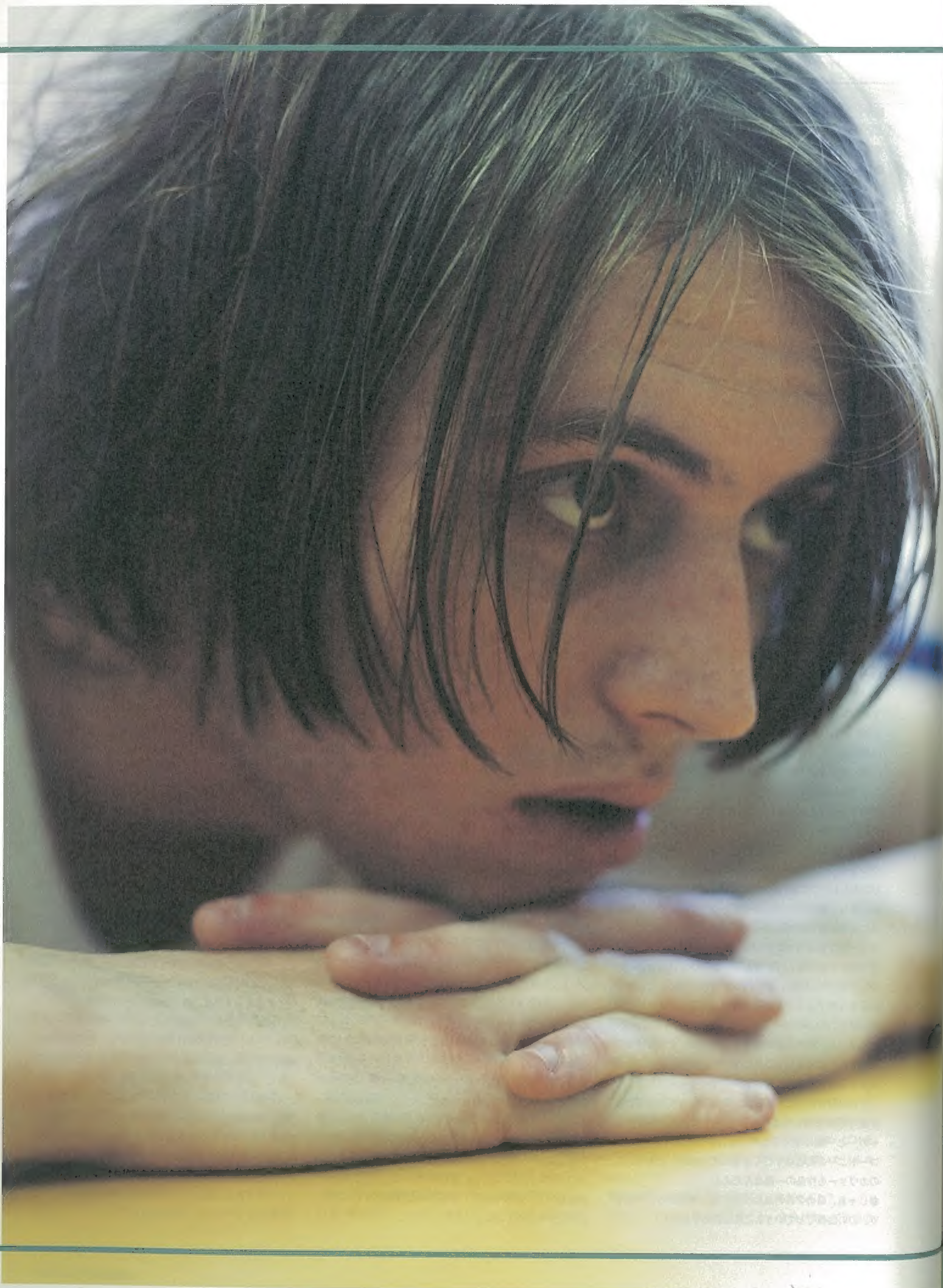
クレイグ「まあ、バンドに入る前から、僕にとっては何もかもが、ずっと残酷なものだったからね。17歳の頃に曲を書き始める前から、僕には何も理解出来なかった。教師、政府、両親——そういうあらゆるクリシェすべてが何ひとつ理解出来なかったんだ。でも、音楽だけが僕に語りかけてきてくれた。だからこそ、僕は音楽に対して、何かを返したいと思ってるんだ。だから、多分、また最初に戻る、スタートに戻るって感じかな。『ヴィジョン・ヴァリィ』の後、僕らはあんまりツアーもしなかったし、僕は人生のつらい時期を通過してた（笑）。でも、今はまた、文字通り、曲が出来て。僕らがやること、僕が長い間やってきたことってまさにそれだけだと思うんだよね。今回の曲を書いてる間、僕は『全部シングルにしたい』って風に考えてたんだけど。僕はこのアルバムに満足してる。ハッピーなんだ。びっくりすることに、他の国も来られた。この前のアルバムの後、もう二度とオーストラリアから出ることはないと思ってたからね」

●じゃあ、1曲目の"ゲット・アウト"とか、"ヒーズ・ア・ロッカー"には、自伝的な部分はある?

クレイグ「まあ、どちらも一部がフィクションで、一部が事実なんだ。全部の曲がそうだけど。だから、自分が知ってること、本当のことを歌うと同時に、やっぱりそこに何か加えなきゃいけない。本でお話を書いたりするみたいにね」

●基本的に、それがあなたのスタイルだもんね?

クレイグ「うん。最初は自分とか、自分が知ってる他の

誰かについて書いてるんだけど、自分のことが別の人のことになったり、別の人のことが自分のことになったりするんだ。だから、ある意味、すごく幅広くて」
●じゃあ、"ヒーズ・ア・ロッカー"の歌詞に出てくる"トリップ"は、どんなトリップを指してるの?
クレイグ「あのトリップはLSDだよ。僕があそこで触れてるのは、まさにアシッドのこと。それだけ。インタヴューで言い足すことがあるとすれば、僕は『LSDから人は多くを教えられるって信じてる』ってことくらいかな。一生を通じてね。それ以上は、何も言いたくないんだけど……。だって、アシッドについて語ることが、僕がアシッドをやってるってこととイコールじゃないから。でも、今までやったことがないって意味でもない。つまり、全部、謎なんだ(笑)」
●うん(笑)。じゃあ、一つ前のアルバムって、すごく悲しみにフォーカスされてたじゃない?
クレイグ「うん」
●今回、客観的に見て、自分達では、何か特定のエモーションに意識的にフォーカスした部分はある?
クレイグ「君が言うように、この前のアルバムには悲しみがあった。文字通り、僕は地獄に行って、また戻ってきた。死後の世界を見てきたようなものだよね。いろんなことを体験したんだ。でも、後悔は一つもない。多くを学んだって気がするから(笑)。僕はただこのアルバムに関しては、1分半、2分の曲ばかりが詰まったアルバムにしたかったんだ。うん、このアルバムって、『ハイリー・イヴォルヴド』にすごく似てると思うんだ。どっちもポップ・ソングが詰まってるし。この前のアルバムの時は、曲があって、とにかくそれをアルバムにするので精一杯だった。全部吐き出して、悪魔払いをするためにね。でも、今回は違うんだ。ほら、だって、カヴァー見てもわかるよね? 前回はこれ(と、黒いカヴァーを見せる)がカヴァーだった。で、今回はすごくカラフルで、生き生きしてる。僕にとってはこれ、ライフってことなんだ。僕にとっては、今の生活がこれ。で、前は生活がこんな風だったんだよ」
ヘイミッシュ「真っ黒っていうね。常にダークで」
クレイグ「そう(笑)」
●この『メロディア』って、タイトルについては?
クレイグ「タイトルに関しては、長すぎないタイトルにしたかったってことだけ。『メロディア』ってクールだと思ったし。僕にとっては意味があるんだけど……。他の人には別の意味があってもいいしね。うん、僕にとってはクールな言葉ってだけかな。あと、このカヴァーもかなり僕が手掛けたんだ。写真とか、コラージュとか。どうしたかっていうと、アルバムが出来た時に、とにかくたくさんヘイミッシュが写真を撮ってて。ちょうどその頃、僕ら、シルヴァーチェアを観に行ったんだよ。で、これは(と、中央上部の写真を指す)は、そのライヴの後の写真。ほんとは(シルヴァーチェアの)ダニエルも入ってたんだけど。そう、ダンディ・ウォーホルズがやったのが好きだったんだよね。ほら、有名人の友達と自分達で写真を撮ってただろ? コートニーがミック・ジャガーと一緒に写ってたり。あれが気に入ってさ。僕、コートニーのことはすごく尊敬してるんだ。だから、このカヴァーも作品の一部なんだよ」
●じゃあ、このアルバムについては、最初からこの短さで、この曲数でっていうところは決めてたの?
クレイグ「うん、僕は新曲を14曲入れて、全部がヒット・ポップ・ソングみたいな感じにしたかったんだ。キラキラしてて、聴く人の注意をすぐに惹き付けるようなね。で、金を稼いでくれるような(笑)」
ヘイミッシュ「途中で中ダレしたり、止まるようなことがない、流線型のアルバムっていうかね」
クレイグ「インストゥルメンタルの部分もそんなにないよね? かなりソング・ベースのアルバムになってると思う。"ヒーズ・ア・ロッカー"も"オレンジ・アンバー"もそうだし。僕が『自分の痛みについて歌ってる』とか、そういうレコードじゃないんだ。これは、小さな絵とか、アート・エキシヴィジョンみたいなレコードなんだよ」
●実際、大半の曲は、1分台か、2分前後なんだけど、アルバムのど真ん中に一曲だけ、6分以上もある"トゥルー・アズ・ザ・ナイト"が入ってる。これは?
クレイグ「最初、あの曲を作った時は、アルバムを締め括る曲かもしれないと思ってたんだ。でも、ヘイミッシュとプロデューサーが、『これをセンターピースにしたらどうか?』って提案してきてさ。曲順に関しては、ホント試行錯誤したんだ。僕ら、〈サウス・バイ・サウスウェスト〉に出て、NYとLAでライヴやって。その間ずっと、毎日違うトラックリストを作ってたんだよ。でも、最終的にこれが出来た時に、すごく満足出来たんだ。バンド全員で作ったし」
●じゃあ、アルバムの最後が、すごくサイケデリックな"シー・イズ・ゴーン"で終わってるのは?
クレイグ「確か、それはプロデューサーのロブのアイデアだったと思う。この曲、ウォール・オブ・サウンドのビッグなサウンドがあるよね? これに比べると、ほとんどの曲は、ギターとヴォーカル、ベースとドラムだけでのすごく削ぎ落としたサウンドだろ? でも、あの曲だけはアコースティック・ギターもディストーションのかかったエレキギターも入ってるし、山ほどヴォーカルが重なってるんだ。とにかくトリッピーで、アシッドな曲なんだ」
ヘイミッシュ「最後にビッグに終わる感じがある。だから、あの曲と"トゥルー・アズ・ザ・ナイト"が最終曲候補だったんだ」
クレイグ「ちょっとスペイシーな感じがあるからね」
●これはマサコの入れ知恵なんだけど、9曲目のタイトルは、クレイグのガールフレンドの本名なんだよね?
クレイグ「カーラ・ジェイン?」
●そう。
クレイグ「うん」
●でも、そんな風にパーソナルな曲を歌うなんて、ジョン・レノンか君くらいだよね?
クレイグ「ああ、勿論、僕はジョン・レノンのことは神として崇めてるから(笑)」
●でも、こんなにもパーソナルなラヴ・ソングを歌うのは怖くないの?
クレイグ「勿論! こんなにあからさまなラヴ・ソングは僕にとって初めてだったんだけど、やってて楽しかったよ。ほら、この曲の一つ前の"ブレインデッド"って、パンク・ソングっていうか、まるで地獄から生まれたメタル・ソングみたいだろ? そういう曲の後にこれがあるのも気に入ってるんだ。僕らのアルバムって全部そうなんだけど、出来る限り、あちこちに飛び移って、どんどんシフトするんだよ」
●じゃあ、1stアルバムには、明確な野心みたいなものがストレートにあったと思う。で、2ndアルバムの場合、"イーヴィル・タウン"みたいな曲に顕著だと思うんだけど、業界のシステムに対する違和感みたいなものがあからさまに表出するようになった。つまり、野心よりも、とにかく音楽業界の一部であることに対する違和感だよね。今、そういった野心との距離はどう?
クレイグ「僕は今、自分達がやってる音楽にすごく自信があると思う。だって、他のことに関しては、僕はまったくダメだから。コンピュータも使えないし、携帯電話も持ってない。そういったすべては、僕にとってはとにかくすごく違和感のあるものなんだ。僕が好きなのは、ただCDを聴いて、曲を書くことだけ。うん、だから、野心はあるよね。だって、やっぱり野心的じゃなきゃいけないと思うんだよ。だって、今じゃ、ホントにたくさんバンドがいるだろ? 僕らが最初に始めた頃に比べても、ホントにいろんなバンドがいる。だからこそ、アーティストでいるなら、そこはリストの一番上であるべきなんだ。野心の高さがね。グレイトなものに到達するにはそれしかないから」
●あなた達が仲が良かったザ・ミュージックは、アメリカでのレーベルが同じだったじゃない?
クレイグ「うん」
●で、僕らからすると、まったく同じタイミングで、両方のバンドが急激に疲弊していって、内側から瓦解していくのを目撃したわけなんだよね。今振り返っても、当時の音楽シーンで生き抜くのは、それだけハードなものだったのかな? そこは、どう?
ヘイミッシュ「うん、確かにあれはハードワークだったよ。『ハイリー・イヴォルヴド』と同じ頃に、ザ・ミュージックも1stアルバムを出して、俺達も彼らも同じレーベルにいただろ? だから、ザ・ミュージックとはアメリカを一緒に長い間ツアーすることになったんだ。とにかく、『ツアーを続けろ、もっとツアーをやれ』って言われ続けた。俺達も、ロブとかも20歳とかだったから、ライヴをやったらその後すぐにバーから追い出されて。かなり惨めな気分にさせられることも多かったんだよ」
クレイグ「勿論、楽しいこともあったけどね。でも、確かに、つらいこともあった」
ヘイミッシュ「だから、多分、俺達は意識的にもうちょっとスケールを小さくしたんだ。バンドがバラバラになっちゃわないためにね(笑)」
●ここ最近も、ザ・ミュージックの連中と話したりはしてるの?
クレイグ「ずっと連絡は取ってるよ。メールとか、電話とか。この間も電話で話したばっかりだし」
ヘイミッシュ「うん、俺も携帯でメールを送ったばっかり。メールとかはやり取りしてるんだ。ザ・ミュージックも〈フジ〉に来るのはわかってたから。俺達、土曜は韓国でフェスに出るんだけど、あいつらもその韓国のフェスと〈フジ・ロック〉に出るんだよね。でも、ちょうど入れ違いでさ。だから、日本では会えないんだけど。でも、来週、向こうがオーストラリアに来るんだよ。だから、『オーストラリアで会おう』って。実際、もう長い間会ってないんだ。2年かな? 俺達が2年前にイギリスでプレイした時が最後だと思う」
クレイグ「うん、ロンドンのライヴに来てくれてさ」
ヘイミッシュ「フィルとロブがね」

多分、1stアルバムをレコーディングしてた時が、僕の人生において一番エキサイティングな時期だった。でも、この『メロディア』っていうアルバムって、『ハイリー・イヴォルヴド』の続きって気がしてるんだ。音楽的に比較するとね。だから、"ハイリー・イヴォルヴド"から始まって、"オータム・シェイド"へと続くあの感じを、今回は、アルバム全編でキープしたいと思ったんだよ。まるで一つの長い曲みたいにね

●でさ、アメリカをツアーしてる時に、俺達がクレイグとロブを表紙にした時があったじゃん?

クレイグ「うん、今まさにちょうどそのことを思い出してたところ。おかしいね（笑）」

●当時、クレイグが言ってたのは、「自分達みたいな新しい世代によって、変化が起こりつつある」ってことだったんだけど。実際、そうした変化は、その後、どうなったんだと思いますか？　さっき、今はもっといいバンドがたくさん出てきてるって話もあったけど……。

クレイグ「あ、僕、今はいいバンドがたくさんいるとは言ってないよ。ただ、『たくさんバンドがいる』って言っただけで。それに、僕らがシーンの一部であったことは一度もないからね。僕らはストロークスとかと並べられて……。勿論、それは良かったと思うんだ。そういったバンドは僕らも好きだったから。でも、僕はそういうことはよくわからない。いいアルバムを作ろうとしただけだからさ。90年代後半、僕は曲を書いて、パブとかでライヴをやってたんだけど、その次の年代に、僕らはアメリカに行って、レコードを作った。僕らはそうしたかったんだ。だから、あの頃はすごく楽しいのとハードワークが組み合わさってた時代だった。そう、僕らはもうすでにかなり多くのことを達成したと思う。明日引退したって、オーストラリアのバンドとしてはいろんなことをやれたと思うし。アメリカでもイギリスでも。アメリカではザ・ミュージックと一緒に二回ツアーをやったし、大勢の人達の前でプレイした。うん、ザ・ミュージックはいいバンドだよね。でも、確実にいいバンドも、悪いバンドも増えたと思うな。残念なことに、ひどいのもたくさん耳に入ってくるっていう（笑）」

●じゃあ、ここ数年の間に出てきた、一連の新しいバンドについては、どう?

ヘイミッシュ「一番嬉しかったのは、アークティック・モンキーズが、俺達とストロークスの影響でバンドを始めたって言ってたことだな。そういうインパクトを自分達が与えたっていうのは、すごくクールだと思った」

クレイグ「うん。たとえ、僕らがU2やR.E.M.ではないにしても、僕らもいくらかインパクトを与えたんだって思えるのはすごく嬉しいよ。僕らがロック・ミュージックにインパクトを与えたことは事実なわけだから。だって、ヘイミッシュが言ったみたいに、アークティック・モンキーズが出てきたんだからね」

●アレックスと話した時に、「クレイグがジーンズに絵を描いてるのを見て、次の日、早速自分もジーンズに絵を描いたんだ」って言ってた。

クレイグ「へえ」

ヘイミッシュ「はははは!　音楽的影響だけじゃなくて、ファッション的影響も与えたってわけだ!」

●とにかく、ヴァインズの話はよくしてた。

クレイグ「すごく嬉しいな。僕、彼は天才だと思うし。ザ・ラスト・シャドウ・パペッツのレコードもすごかったし。素晴らしいアーティストだよね」

ヘイミッシュ「何度か会ったこともあるんだよ。すごくクールな連中でさ。最後に会った時も、もうすでに大成功してたのに。特にイギリスではね。なのに、まだ普通の4人の野郎って感じだった。どこの出身だっけ？　ニューキャッスル？　いや、シェフィールドだ!」

●そうそう。

クレイグ「マーク・E・スミスの出身地だよね。それと、パルプもね（笑）」

●クラクソンズもあなたの話、してたよ。

クレイグ「クラクソンズのことは、僕ら、すごく好きなんだ。彼らのライヴに行ったんだけど、その後、会ったんだよね」

●ああ、そのことも話したかも。サイモンに、「クレイグはあなたのアイドルなんだって?」って言ったら、もう顔を真っ赤にしてた。

クレイグ「僕、すごくクールなバンドだと思ったな。すごくグレイトで。僕ら、クラクソンズのシドニーのライヴに行ったんだよ。で、ライヴの後ちょっとつるんで。エキサイティングな新しいバンドだと思った」

ヘイミッシュ「クラクソンズも俺達のファンだって知らなかったよ。クールじゃん（笑）」

●でも、本当に、君達がいなかったら始まらなかったことがたくさんあると思うよ。

クレイグ「ありがとう。でも、アーティストとして、僕は自分のベストを尽くしてるだけだから。それが人に影響を与えるんなら、これ以上のことはないよね。別に謙遜しないでいいよね?（笑）」

ヘイミッシュ「うん、使い捨てとかじゃない気持ちになれるよな。みんなが今でも大事にしてくれてるんだから。グレイトだよ」

クレイグ「そう、僕がどんな風に振る舞おうと、何があろうと、僕らのアルバムは長い間残っていくんだ」

ヘイミッシュ「プラスティック製だから、すぐに割れないしな（笑）」

クレイグ「今じゃ、ライヴもずっと良くなったしね。ようやく僕自身も楽しめるようになった。スケジュールもうまく組まれてるし、前に比べて、ずっとプロフェッショナルなアプローチが取れるようになったと思う。そう、CD、アルバムに対しては僕、100%プロフェッショナルだったと思うんだよ。そうやって『ハイリー・イヴォルヴド』も、他のアルバムも作ってきた。で、ツアーに出て、騒いで。でも今は、ライヴでもハーモニーを入れたり、出来るだけアルバムの音を再現しようとしてるんだ。硬直した、つまらないものにならない程度にね。だって、バンドのライヴを観てて、CDを聴いてるみたいな気持ちになると、やっぱ退屈だよね？　だから、バランスを取らなきゃいけないんだけど、僕らは、その最適なバランスをようやく見つけたと思う」

●じゃあ、今はどういうモードなの？　このアルバムのプロモーションもあるとは思うんだけど、その後とか。

クレイグ「もう新曲が出来てるから、すぐにデモにするつもりなんだよね。新曲が5、6曲あって。2、3週間以内にデモをレコーディングするつもりなんだ。それには僕、すごくエキサイトしてる。みんなは今、このアルバムを聴き始めたところだけど、僕らの"今"ってわけじゃない。勿論、ステージでプレイするのは楽しいんだよ。でも、僕はもう新曲のことを考えてる。そこは僕の性格なんだ。バンドに入ってからずっとそう。やっぱり一番大事なのはいい曲をたくさん書くことなんだ。それが唯一のクライテリアだし、一番僕が目指してるのはそこだしね。家にいる時はそれしかやってない。デモって、僕にとってはすごく神聖なものなんだ。例えば、初期のデモを聴くと、僕にはまるで魔法みたいに思える。去年、またロブ（・シュナッフ）とレコーディングしてる時も、僕、彼に言ったんだ。『多分、"ハイリー・イヴォルヴド"をレコーディングしてた時って、僕の人生において一番エキサイティングな時期だった』って。でも、このアルバムのミキシングの段階でも、僕はもっと興奮してたかもしれない。実際、この『メロディア』っていうアルバムって、僕からすると、『ハイリー・イヴォルヴド』の続きって気がしてるんだ。音楽的に比較するとね。だから、"ハイリー・イヴォルヴド"から始まって、"オータム・シェイド"に続くあの感じを、今回はアルバム全編でキープしたいと思ったんだよ。まるで一つの長い曲みたいに。ね……誰か、僕がしゃべりまくるの、止めてよ」

●大丈夫（笑）。でも、"オータム・シェイド"のシリーズは、今回の第三弾の後、まだ続く予定なの?

クレイグ「僕、レコーディング中に、ロブにこう言ったんだよ。『もうこれで終わりだ』って。そしたら、ロブが『そんなこと言っちゃいけない』ってね。で、『オッケー、じゃあ、そこは言い切らないことにする』ってことにしたんだ。うん、これからどうなるか、まだ可能性が開かれてる方がナイスだと思うし。つまり、今でも4番目があるかもしれないってこと（笑）」

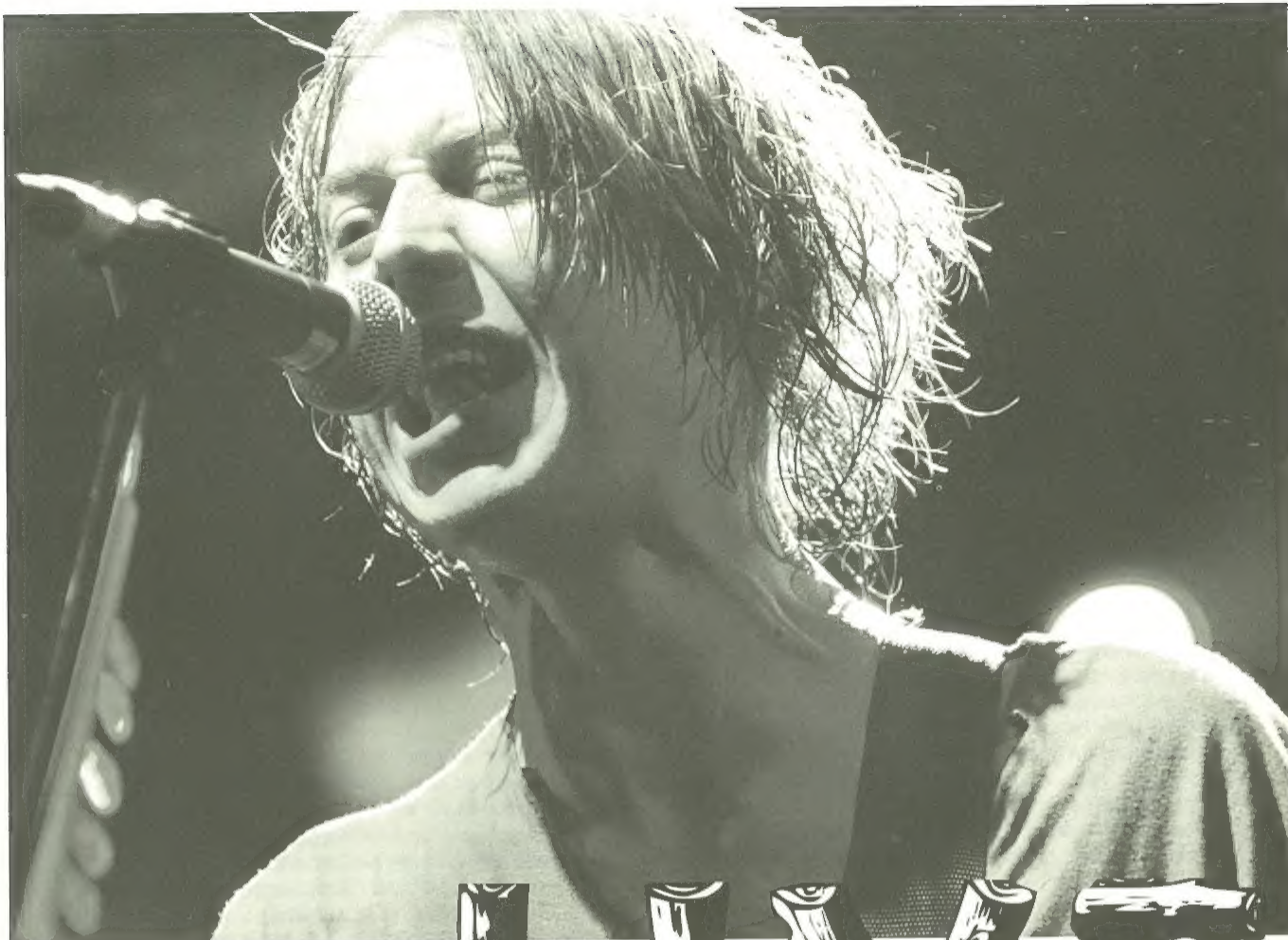
ヘイミッシュ「『もうない』って言っちゃダメだよな」

クレイグ「その通り（笑）」

●じゃあ、最後の質問です。音楽を始めたことで、当然、いい変化もホントたくさんあったと思うんだけど、逆に、何か悪い変化はあったと思いますか?

クレイグ「いや、まったくない。僕が考える限り、僕は自分の人生で一度もミスを犯したことがないから」

ヘイミッシュ「（笑）」

クレイグ「だって、僕は常にポジティヴなものを外に出してきたんだ。"スクリーム"や"ゲット・アウト"みたいな曲でさえね。ああいった曲の中での僕は壊れてるかもしれないけど、同時にあれはアートでもあるんだよ。ロックンロールでもあって……。僕が見る限り、僕が作った4枚のアルバムと、僕がこの地上でやってきたことすべてに僕は満足してる。絶対にね」 S

25 JUNE
MO'SOME TONEBENDER［モーサム・トーンベンダー］
リキッドルーム恵比寿

4、5、6月と3ヵ月連続〈リキッド〉公演を行ってきたモーサム。公演ごとにメンバーの一人ひとりがライヴをプロデュース（5月の藤田さんの時は、なんと藤田さんの弾き語りもあったらしい!）、最終回の今公演は、ヴォーカル百々さんの回。照明はシャンデリアで、小オーケストラ隊もいて、いつもと全然違う雰囲気！出来立てほやほやの新曲や、会場限定で各月1枚ずつ売られていたシングル（3ヵ月連続で即完売。もう手に入りませんよー）からも何曲か演奏してくれたり、とにかくスペシャルなライヴでした。新曲を聴く限りでは、またキッチュでナンセンスなモーサムが戻ってきてくれているようで、嬉しい限りです！ もうすぐ出来上がるアルバムが超楽しみ！ （永松雄大）

3 JULY
曽我部恵一BAND
なんばハッチ

ライヴ当日から時間が経って、何か言いたくてしょうがないけど、何か言えることがあるんだろうかって思います。あの日、僕は最高のロックンロールに出会ったんです。それからの僕は、「I Love Rock'n'Roll」なんです。100パーセント本気で……。あぁ、これしか言えることがないよ、僕には。僕は本当に「魔法のバス」に乗れる気がしたんだ。朝まで、いやずっとずっとロックンロールは僕の側にいてくれるんじゃないかって。終わった時、とてもとても悲しかった。みんなが笑顔で帰って行く中で、僕は一人会場の中で係員に追い出されるまで座り込んでいた。誰かと一緒にいたかった。だけど誰の顔も見たくなかった。僕はただ、ロックンロールと一緒にいたかった。
（兵庫県／三澤淳史／20歳）

11 JULY
七尾旅人、曽我部恵一
リキッドロフト恵比寿

七尾旅人と曽我部恵一による、オールナイト弾き語りライヴ。8割以上を占めていたであろう、曽我部さんのファンに七尾旅人はどう映ったのでしょうか？七尾さんは、サニーデイ・サービスの“サマー・ソルジャー”、“白い恋人”をカヴァーしてました。七尾さんのフィルターを通すと随分と違った印象の曲になるんですね。曽我部さんは180度雰囲気が変わり、終始笑いが絶えないステージでした。最後は二人で弾き語ったのですが、曽我部さんの様子が変だ！ 異常にテンションが高くなり、叫び出したと思ったら、トイレに行ったきり30分帰ってこないぞ！ 帰って来たと思ったら、ステージ上で爆睡しちゃいました……。曽我部さんが寝ている横で弾き語る七尾旅人さん……（笑）。いいもの観れました。 （永松雄大）

16 JULY
髭（HiGE）
リキッドルーム恵比寿

立ち込めたスモークの中から現れた一匹と5人。これは夢？ それとも現実？ と思えるほどのめくるめく40分。休憩を挟み、金太郎の着ぐるみで登場した須藤氏、そして第二部の1曲目は“ロックンロールと五人の囚人”。何度かあったアンコールの締めは“ハートのキング”。悪ノリなのか真面目なのか。全編を通していつも以上に笑顔でノリノリで踊りながら演奏しているメンバー。なんだかいろいろな意味でニヤニヤが止まらない2時間だった。（神奈川県／佐藤寛子／26歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、くるり］
苗場スキー場

マイク・テストの時から岸田さんが「かえるの歌が聞こえてくるよ、クワックワッ～♪」と歌い、すでに心地よいゆるい雰囲気が充満。「それではまた後ほど」というメッセージの1分後にライヴ開始（笑）。新曲に始まり、次に演奏されたのが“さっきの女の子”！ これは涙ものでした。その他にも代表曲目白押しでしたが、『ワルツを踊れ』からは1曲もなし。彼らはもう次に向かっているようです。すごいぞ、くるり。ありがとう、くるり。 （大阪府／川口達平／22歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、ジェイミー・リデル］
苗場スキー場

オーセンティックなバンド・スタイルになるのかと思ったら、“アナザー・デイ”から始まったステージは、生バンドとラップ・トップを駆使した、なかなか実験的なスタイル。自分の声をサンプルしまくって独特なファンクネスを作り上げていく。それらが組み合わさってバンドが爆発する時がやはり最高で、“リトル・ビット・フィール・グッド”は、まさにフィール・グッド、しかもジェイミー、思った以上に歌うまー！ しかも黒シャツとストライプのパンツを着こなして、舞台の端に座って歌っちゃったりするから、もう女の子はイチコロでしょう。 （大阪府／木津毅／23歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、ザ・ヴァインズ］
苗場スキー場

初っぱなから、各アルバムのリード・シングル連発で始まったライヴは、クレイグが「ビューティフル」と言うくらいの盛り上がり！ それもそのはず、みんなが待ち望んでいたヴァインズの、クレイグのライヴだもの。盛り上がり過ぎて途中に挟まれる静かな曲がクール・ダウンになって助かりました。終盤には“ミス・ジャクソン”までやってくれました。クレイグも満足気に最後はステージ破壊です。お帰りなさい、クレイグ。また来てね。 （新潟県／茂木雄作／25歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、ザ・ヴァインズ］
苗場スキー場

キャンセルされた2004年のフジから、もう4年。今年のラインナップにヴァインズの名前を見つけた時は、喜ぶと同時に不安もあった。ほんとに来るの？ ちゃんとライブ出来るの？ でも、満員のレッド・マーキーにヴァインズは現れた。あのクレイグが、ヴァインズが目の前で演奏している。それだけで感情が爆発しそうだった。そして、曲のイントロで歓声を上げ、“ライド”では手拍子をばっちり決め、ほとんどの曲でコーラスしまくるオーディエンス。みんな最高。ほんとに、「この日を待ってた」って気持ちが一つになった気がした。お帰り、クレイグ。ゆっくりでいいので、いつかまたライヴを観せて欲しい。これが伝説になるのは嫌だ。 （大阪府／竹井将吾／25歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、オールナイト・フジ］
苗場スキー場

電気グルーヴ、“N.O.”やってくれて超嬉しかった。その後の、カガミ～ポール・ヴァン・ダイク～スギウラムの流れが何よりも完璧過ぎました。残ってる人もまばらな中、結局朝6時過ぎに音が止まるまで残って踊っちゃいました。最後にブライアン、「では、これからぐっすり寝て、また今夜アンダーワールドあたりで会いましょう」とか言って。地面はゴミだらけでしたが、それがどうしようもなく気に入った。あの夜ほど、きれいに見えた月もない。ウサギの被り物した女の子二人組にピース！ （京都市／佐々木峻一／20歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン］
苗場スキー場

まず思ったのは、ビリンダ可愛いってこと（笑）。みんな口々に「かわいい!」とか「スタイルいい!」とか言ってました。ケヴィンもなんだか時折見せる微笑が神秘的な雰囲気を醸し出してました。でも、何といっても最後の“ユー・メイド・ミー・リアライズ”でのノイズ地獄では我々を凍り付かせてくれましたね。あれは何分くらいやってたんでしょうか？ 僕の体感では20分以上に感じたんですけど。寝そうになりました（笑）。マイブラに罪はない。僕が疲れてただけなんです。 （宮城県／平井陽介／27歳）

25 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、マイ・ブラディ・ヴァレンタイン］
苗場スキー場

1歳の長男を連れて、家族で初のキャンプ参加。パエリアをほおばり、ストーンズ・サークルで太鼓を叩き、キッズ・ランドではしゃぎ、マイブラに驚き。そして2日目は、5回の食事と2回の風呂だけで1日が過ぎていきました。とりあえず、無事に終わってよかったです。 （神奈川県／齊藤明／33歳）

26 JULY
FUJI ROCK FESTIVAL '08
［フジ・ロック・フェスティヴァル、ゴティエ］
苗場スキー場

登場するや否や、その端正なルックスに場内騒然。顔が小さい！ プログラム音に、一人で鍵盤、ドラム、パーカッションを行き来しながら生音を重ねていく、とても非効率的な演奏スタイルは、パフォーマンスとして非常に楽しいものでした。MCがほとんど日本語